

「卅三間堂棟由来」詞章

夢をや結ぶらん。妻は辺りを立ち退いて、奥を覗いつ立ち戻り、おずおず傍へ立ち寄りて、揺り起こせども、夫は寝付きの高軒。風が持て来る斧の音、伐木とうとうちようちようとうと、木を伐る音や堪えけん。お柳は身内の苦しみを、じつと堪えて立ち寄れど、得も岩代の結び松、われは柳のみどり子が、顔を眺めつとつ置いつ、漸に気を鎮め、

「オオそれよ、互いに顔を合わせては、身の上語るも面映し。寝入り給うを幸いに、今、自らが言い残す。必ず夢と思さずと、あからさまに聞いてたべ。ノウわれこそ真は柳の精。雨露の恵みに生い育ち、斯様に夫婦となることも、一方ならぬ因縁ぞや。先の生にて誓いたる、契りを結ばんそのために、仮に女の姿と変じ、柳が下に待ち受けて、夫婦となりしも五歳の、春や昔の春の頃。季仲が鷹狩に、鷹の足緒の掛かりし時、数多の武士に伐り崩され、既に枯れなんこの柳。その時お前が一矢の手柄、鷹を助けて葉柳の、枝に障りも、アレ、アレアレ又もやここに散り来る葉は、われを迎いに来るか」

と思えばやる方詮方も、泣く泣く見やる足元へ、散り来る柳の葉隠れや、乱るる心押し鎮め、

「その時の情けの恩、送る月日も重なりて、柳の花の、コレこのみどり丸。もはや今年で五歳の春秋の重なれば、乳がなくと育つべし。成人の後々は、父の弓矢を受け伝え、潔い名を挙げてたも。ヤ、ヤ、ヤア。母は今を限りにて、元の柳に帰るぞや。必ず草木成仏と、回向を頼む夫よ子よ。離れ難なや悲しや」

と言う声さえも忍び泣き、立って見、居て見、声上げて、『わっ』とばかりに泣き叫ぶ、音に目覚ます平太郎、

「さては夢とも現とも、聞きしは真でありけるか。何とてつれなくやるべきぞ」
と抱き止むれば一間より、老母も共に転び出で、

「様子は聞いた、コレお柳、嫁女のう」
と呼ぶ声も、散り来る柳の葉隠れに、形は消えて失せにけり。

『そこよ』『ここよ』と母と子が、尋ぬる音にみどり丸、
「かか様どこへ往かしゃった、かか様いのう。かか様いのう、かか様」
と父が後ろに駆け廻り、尋ね迷う幼子を、見るに堪え兼ねてて親も、

「みどりが母やい」

「嫁女のう」

「かか様」

と声をはかりに三人が、尋ね廻れば、さすがにも、引かるる心執着しめうじやくの、又も姿を現す有様、

「ヤアかか様か」

と駆け寄る幼子、夫も涙の声を上げ、

「非情の草木くくさきといいながら、情けあればこそこれまでに、睦まじくも馴れ馴染なじみ、一人の

若もを儲もけし身みが、何とて振り捨て帰りしぞ。せめては母を見送るまで、共に介抱かいほうしてくれ

よ」

とかこち嘆なげけば、漸ようように、萎しおるる顔を振り上げて、

「伝え聞く、安倍の童子どうじが母上も、ちようどわが身と同じこと。一人の若を残し置き、信田しのだ

の古巢ふるすに帰りしとや。それは野干やかんの年経ふる身、われは元もとより草木そうもくの、帰る古巢の柳は今、

伐り崩されて枯れ柳、帰るといふは消ゆる身に、何とて形を残すべき。時こそ来たれ、い

ざさらば、さらばさらば」

の声の下、姿は見えずなりにけり。

『わっ』とばかりに三人が、闇より闇に迷いつつ、互いに手に手を取り交わし、前後不覚

に嘆なげきしが、涙ながらに平太郎、わが子を膝ひざに抱き上げ、

「ノウ母人様ははびと、われよりはこの若が愛着あいじやくに引かされて、さぞや名残りの惜しからん。たと

え姿は見えずとも、柳は妻が亡き面影。今一度このみどりに見せもし、われも見ましたし。

又蔵人くらんどとやらんにも対面せん。某それがしは今直ぐに、伴せがれを連れて柳が元へ」

「オオそれぞれ、一時あきとも早う孫まごを連れて」

「ハハ、然らばすぐさま。サ、みどりよ来い」

とわが子の手を引き平太郎、柳が元へと辿たどり行く。早や東雲しののめの街道筋、木遣り囃子はじで地車ぢまの、

轟とどろく音ねぞ勇ゆうましや。

「木遣り音頭」へ和歌の浦には名所がござる。一に権現、二に玉津嶋、三に下がり松、四に

塩釜しほかまよ、よいよいよいとな」

俄にわかに車地ちに座り、えいや声して人夫にんぶ共、押せども引けども一寸も、先へ行かぬぞ不思議

なる、警護けいごの武士進しんノ蔵人、

「騒さわぐな者共。思い当たることこそあれ、急せくな急せくな」

と制するところへ、身拵しんじゆえして平太郎、みどりを連れて出で迎い、

「さてこそこの木の動かぬは、目前親子恩愛の、別れを惜しむと覚えたり。妻が霊をも諫めるため、なにとぞ綱をこの俵に、引かさせて給わらばありがたからん」と願うにぞ、

「ホホオさこそさこそ。某もさは存ずるところ、左様ならばこの柳、新宮の浜先まで。後は海手を流さん。いざご用意」

と勸むれば、

「ハハア、忝し」

と一礼述べ、みどり諸共立ちかかり、木遣り音頭は父が役、かざす扇も萎れ声、

「木遣り音頭」へむざんなるかな幼き者は、母の柳を、都へ送る、元は熊野の柳の露に、育て上げたる、そのみどり子が、よいよいよいとな」

「ヤア、こりや俺がかか様か」

と綱引き捨てて『わっ』と泣き、継り嘆けばてて親は、涙に声も枯れ柳、引けば引かるる恩愛の、

『孫よ孫よ』と夕べまで、愛しがったる老母さえ、道の巷に葬らんと、かき抱きたる孝の道。忠義に厚き蔵人が、諫めて帰る都の土産。柳と柳と契りたる、連理返りや楊枝村、女夫坂とて言い伝う、棟の由来因縁を、語り伝えていちじるき。

*上演に際し、詞章に多少の異同があることをご了承ください。